

研究論文

患者と看護学生の役割関係に関する研究

— 周手術期患者への面接調査より —

A Study on The Role Relationship
Between Patients and Nursing Students

— Based on Interviews of Surgical Patients —

下平唯子 (Yuiko Shimodaira)* 本道和子 (Kazuko Honndou)*
 神保会里 (Eri Jimbo)* 岡部聡子 (Toshiko Okabe)*
 栗屋典子 (Noriko Awaya)** 桜井礼子 (Reiko Sakurai)**
 溝呂木幸子 (Yukiko Mizorogi)***

要 約

本研究は、役割という概念を用いて周手術期患者と看護学生の相互の関係を説明した帰納的記述的研究である。

周手術期患者が看護学生との関わりをどのように受けとめているかを明らかにするために研究者の作成した面接ガイドを用いて20名の患者に半構成的面接を行った。語られた内容をテープ録音し、質的に分析した結果、患者は家族的役割、先輩的役割、教師的役割、練習モデル役割、患者役割を認識しつつ患者学生と関わっていることが明らかになった。

患者がこれらの役割を認識するという事は、学生にその補足的役割を期待しており、また認識した役割を遂行することで患者にはさまざまな利得があると推察された。これらの役割認識のなかで家族的役割は、周手術期患者が認識する役割の特徴であると考えられた。患者—学生の間関係を両者の視点で客観的にとらえるために、役割関係のモデル化を試みる事が今後の課題である。

キーワード：看護学生・周手術期・患者・役割

I. はじめに

医療技術の進歩と共に、看護ケアの質が問われる時代となってきた。ケアの質を構成するカテゴリーの要素には“患者と看護婦の対人関係”や“患者の気持ちをどう支えるか”が含まれているといわれている¹⁾。このことは、患者と看護学生にも当てはまると考える。いい換えれば、患者と看護学生の対人関係や看護学生が患者の気持ちをどう支えるかは、ケアの質を高める要因の1つであるといえよう。

しかし、周手術期の看護学実習においては、この対人関係の難しさや患者の気持ちを支えることを困難なものにしている状況がいくつかが考えられる。初めて全身麻酔で手術を受ける患者は、術前の不安や緊張、術後の疼痛やADLの低下などにより一時的に危機的状況にあるといえる。また、看護学生にとっても周

手術期の患者を受け持つのは初めての体験である。看護学生自身が、患者と一緒に手術を受けるかのような緊張した状況にあり、患者の気持ちを支えることが難しい状況である。さらに、学生自身の社会的経験や対人関係の未熟さが、世代の異なる患者と信頼関係を築くことを困難なものにしている。このように、双方が危機的状況にある中で、看護学生が、患者と人間関係をスムーズに形成することや患者の気持ちを支えることは、ケアの質の向上に影響する重要な課題となっている。

患者—看護婦関係に関する先行文献では、ペプロウ²⁾、トラベルビー³⁾らが「看護とは対人関係のプロセスである」と述べ、それぞれ関係形成のプロセスを説明している。また、Morse(1991)は、看護婦への面接調査により、関係性の4つのタイプを抽出し、“関係をうまくまとめる”という中核概念を明らかにし

*東京都立保健科学大学

**大分県立看護科学大学

***虎の門病院

患者－看護学生の関係性については、患者－看護婦の関係を応用して、いくつかの研究報告がされている⁵⁾⁶⁾⁷⁾。しかし、どの文献も双方の関係を質的な視点で見ると、関係の深まる過程で見ると、いずれにおいても関係を見るとき視点の難しさを報告している。

安東らは⁸⁾、患者と看護学生の間関係に影響する要因として、最終的に良い関係を形成するには、患者の全体像の把握の程度が重要な要因となり得るという結果を報告している。長田⁹⁾は、看護学生が患者との人間関係で体験する危機の実態調査を行っている。その中で、学生にとって衝撃的な危機は、“患者の否定的な言葉”“患者との会話”であると報告している。しかし、患者の否定的な言葉や学生を受け入れる状況については、双方の人間関係が互いに影響しあった結果とも考えられ、看護学生が体験する危機の要因は複雑である。

患者と看護学生の関係性に関する文献検討の結果、人間関係の確立の過程と影響要因については、看護者側の視点からその概要が明らかになりつつある。しかし、患者の視点で看護学生との関係性や人間関係の形成過程を明らかにした研究は見当たらなかった。危機状況にある周手術期患者とより良い関係を意図的に築くには、看護者側の視点だけでなく、患者の視点も含めて関係性を明らかにすることが必要だろう。

看護教員や実習指導者が、患者の視点での看護学生との関係性を理解することは、看護学生が患者とより良い関係を意図的に形成するための指導上の貴重な指針となると考える。

II. 研究目的と方法

1. 研究目的

初めて手術を受ける患者が、看護学生との関わりをどのように受けとめているか、またその関わりが形成される過程を明らかにする。

2. 研究デザイン

患者が語る看護学生との関わりの内容を Grounded Theory の手法を用いて分析する記述的帰納的研究である。

3. 用語の説明

1) 看護学生

東京都内 T 医療技術短期大学看護学科の 3 年生(以下、学生という)

2) 周手術期患者

東京都内 K 病院において全身麻酔で手術を受ける健康上の問題を持つ成人・高齢者

4. 対象者

次の条件を満たす患者 20 名

- 1) 全身麻酔により初めて手術を受けた患者で調査の目的に同意した者
- 2) 身体的・精神的に安定した状態であり、面接に応じることができる者
- 3) T 短期大学学生が受け持ち、学生との関わりが初回の患者

5. データ収集方法

3 週間の実習終了後、病棟内のカンファレンスルームにて、上記の条件を満たす患者に、研究者作成の面接ガイドを用いて半構成的面接を行った。対象者の承諾が得られた場合に面接の内容をテープ録音した。面接時間は 30 分前後とした。

6. 面接ガイド

面接ガイドの内容は、学生のイメージ、学生がつくことに対する気持ち、学生との対応、関わりの中で困ったこと、学生の看護ケアに対する要望等である。

7. データ収集期間

平成 9 年 7 月～平成 9 年 12 月まで

8. データ分析方法

面接終了後できるだけ早い時期にテープ起こしを行うと共に、面接中に研究者が感じたことや面接中の患者の印象をフィールドノートに記録した。患者の語った内容の逐語記録を Grounded Theory の手法により、コード化、カテゴリー化を行い、概念を抽出した。

Grounded Theory Approach は、人間の行動を象徴的相互作用の観点からとらえ、中範囲理論を開発する研究方法である¹⁰⁾。実際

に起こっている現象を基に、複雑微妙な心理・社会的現象に共通して見られる基本的パターンを説明する理論を構築するために、質的データを系統的に収集し、分析する研究においては有効であるといわれている。さらにこのApproachの目的は、適切なカテゴリーを発見し、そのカテゴリー間の関係を発見すること、そして問題点を解明していく理論を構築することである。

このことは、患者が学生との関わりをどのようにとらえているか、その関わり形成される過程を明らかにしていく本研究における適用の有効性を示している。

9. 信頼性と妥当性

質的な研究方法においては、研究者自身が測定用具であり、様々な価値観や関心により信頼性に欠けると考えられている。そのため、信頼性については、面接中のフィールドノートを作り、テープを繰り返し聴くといった方法で、面接の中で起こっている傾向に気づき、研究者自身の先入観や偏見を明らかにした。解釈の妥当性については、研究の経過を通して研究者間で意見交換に務め検討した。

10. 研究における倫理上の配慮

面接の録音内容はデータとして記述されるが、研究目的のみに使用し、秘密を厳守することを約束した。また、研究結果は、個人名が特定できないように配慮した。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の背景と面接に対する態度について

1) 対象者の背景

男性8名、女性12名、平均年齢61.9歳(34歳から85歳)であった。消化器系の手術を受けた者15名、呼吸器、骨・関節系の手術は各2名、乳房の手術を受けた者1名であった。骨・関節系と乳房の手術以外は、ほとんどが悪性腫瘍であり、12名は病名について告知されていた。職業については、面接の時点で有職者は12名であった。平均面接時間は24.5分だった。

これらの患者を受け持った20名の学生のう

ち1名は男子学生であった。学生の年齢は、20才から21才であった。

2) 対象者の面接に対する態度

面接を依頼した患者の多くは、調査目的について納得し、面接の快諾が得られた。面接に際しては、患者自らが時間前に指定場所に待機するという場面が多く、調査研究に対して積極的な関わりがみられた。

2. 学生に対する患者の役割認識

語られた内容を学生に対する関わりと人間関係形成のプロセスの視点でカテゴリー化した結果、患者は様々な役割を認識し、学生と関わっていたことが明らかになった。

例えば、ある患者は「学生さんが相手だと楽だよ。看護婦さんが相手だと、僕等は患者でしかないけど、学生さんが相手だと、いろんな役割がとれるから…」と語っていた。関係形成のプロセスは、語られた内容からは明らかにできなかった。

従って、本論文では、この役割に焦点を当て患者と学生の関わりについて論述する。

患者が認識していた役割として、次の5つのサブカテゴリーが抽出された。

1) 家族的役割：親役割と祖父母役割から構成されていた。

ある患者は、「私は、子どもが男ばかりなんです。ですから自分の娘みたいな感じで受け入れました。男の子ばかりで、一人お嫁さんに看護婦さんが欲しいと思うけど…」と語っていた。患者は、学生を娘として受入れ、家族の一員のように親しい感情を抱き、何でも話し合える関係を作りながらも、必要とあれば注意するという自立を促す関わりをしていた。親役割を認識している患者は、学生の為に役にたちたいという思いが強い。年齢的には、学生の親世代の患者が、この役割を認識する傾向にある。しかし、男子学生が受け持った男性患者は、息子として学生を認識するというより「同じ職場の部下が一人増えた感じ」と語っていた。

祖父母役割は、「私の係になっていた」「本当に身内の人のようにいろいろ話を聞いていただいて、心の安らぎになりました」「我がままが言えました」などの患者の言葉

から、親として子の自立を促すというより、孫には何でも話せるというような、そして何でも話を聞いてくれるという気心の知れた存在として学生を受け入れている役割をさす。祖父母役割を認識している多くの患者は、学生を「私（患者）のために側に居てくれる」「私、専用の人」と、とらえていた。年齢的には学生にとって祖父母の世代に相当する患者が、この役割を認識し、遂行する傾向にあった。また、術前から日常生活の援助を必要とする患者や術後の長期のリハビリテーションを要する患者がこの役割を認識する傾向にあった。認識する時期として、患者は親・祖父母役割共に、初対面の時からこの役割を認識していた。

2) 先輩的役割

ある患者は「これから、我々が病気になった時に、手となり足となってくれる人だろうと思った」と語っていた。学生を職業人としての後輩ととらえ、これからの成長発達を期待する役割をさす。役割行動面では、職業人として、あるいは人生の先輩として、学生に人生観、価値観、処世術を語ることが多かった。語るという一方通行だけでなく、看護を“尊い仕事”だととらえ、これからの若者に声援を送るという関わりも見られた。受持ち当初より、相互関係が少し形成された頃からこの認識がされていた。年齢的には、学生の親・祖父母に相当する年代の患者に多くみられた。

3) 教師的役割

「シャンプーして下さったけれど、洗い方が優しすぎるんですね。最後に私にやらせてって感じで、自分でやったんです。私のやるのを見るのも勉強になるかなと思って」という患者の言葉に代表されるように、学生に対して、実習への取り組みに対するアドバイス、具体的なケアのアドバイスや、学生が勉強の為に必要なケアが実施できるようマネジメントしたり、学生に課題を提供したり、レポートが書けるかどうか心配したりするような役割をさす。現役の管理職の人や元教師・医師だった人がこの役割をとりやすい傾向にあった。

4) 練習モデル役割

ある患者は「遠慮して血圧を計っていたところがあったので、何度やってもいいから、測定の仕方とか、何回もやらせたことがあるんですよ」「勉強だと思って胸のしこりを触らせました」と語っていた。患者が学生の看護技術の向上のために練習台となり、学生の勉強に役立ちたいと認識し、行動する役割をさす。患者に精神的な余裕がある場合にこの役割を認識し遂行していた。

反対に、患者自身が役割を意識するあまり「何をしゃべればいいですか」「どう行動すればいいですか」のように、学生の対応に戸惑いを感じている患者もいた。しかし、この場合でも必要最小限の検温の練習モデルとしての役割は果たしていた。

5) 患者役割

「いつも謙虚で、いいですか？ という感じなので、嫌なら嫌といえました」という患者の言葉からは、学生の為の練習台としてのモデルではなく、一人の人間としての主張ができたことを表している。

患者は「ネブライザーとか、食事とか、ひとつひとつ勉強してきて、いろいろお話してもらいました」「特に、手術の後は体を拭いてくれたり、さすってくれたりして心強かった」「訓練をさぼろうとすると、やったほうが良いんじゃないかと」「一生懸命で、親身になって考えてくれたから、段々打ち解けてきて…、(学生がつくことが)負担じゃないね」「自分で調べてきたことを一生懸命説明してくれた。だから、当てになるし、安らぎというか、看護婦さんより何でも話せた」などと語っていた。

この役割は、患者が認識するというより、知らず知らずのうち(例えば術後の身体的・精神的苦痛が強いときなどに)にとっていることが多く、看護者からの援助を必要としている役割をさす。学生は、清潔ケア、知識に基づいた説明、身辺の世話、励まし、話相手などの関わりで対応していた。

以上、患者の認識する5つの役割について述べた。患者は、自分が置かれた身体的・精神的状況に応じて、これら5つの役割を単独で、あるいはいくつかの役割を組み合わせ

遂行していた。また、患者の中には自分の役割遂行の自己評価を行い、自分の関わりが良かったかどうか疑問を抱いたり、私用で学生を頼りにしすぎたのではないかと反省している患者もいた。

患者は学生に対して多様な役割を認識し、その役割を演じながら、関係を築いていることが明らかになった。しかしその関係のプロセスについては、今回の面接調査では明らかになっていない。

Ⅳ. 考 察

以上、患者の認識する役割や役割行動について述べた。役割とは、特定の地位を占める人々の全てに期待される適切な行動様式である¹¹⁾。患者が学生と関わりを持つことは、双方が何らかの役割関係にあることだといえよう。患者がある役割を採用することは、学生に別の役割を想定することと対応している¹²⁾。

1. 次に役割認識について、患者が学生にどのような役割を期待しているのか、また患者が役割を遂行することでどんな利得があるのかという視点で考察した。

1) 家族的役割

この役割は、子や孫に相当する学生に家族の一員のような情緒的なつながりを求めているものと考えられる。家族の間柄なら何でも話し合えるし、話を聞いてもらえる、また何かを頼みやすい存在として、患者は学生に家族の一員のように行動することを期待している。特に、麻酔や手術に関する不安が強い時期や術後のセルフケア能力が不足している時など、家族の一員のような対応が学生に期待されている。患者は、自分の気持ちが分かってくれる家族や学生が側にいてくれ何かと面倒見してくれることで情緒的に安定するのであろう。

ペプロウ(1973)は、『患者が看護婦に誰かの代理人としての役割を課している場合が多い』と述べている¹³⁾。そして、患者が心理的に、頼り無さ、無力さ、誰かに依存したいという強い願望を感じている場合は、自然と患者の心の中にその身代わりとなる人の姿が映ってくると説明している。周手術期にあり心理的に不安の強い患者は、上記の状態にあると

考えると患者が親・祖父母役割をとることは、学生に子や孫の代理人としての役割を期待しているといえよう。

学生にとっても、患者から受け入れられるだろうかという不安が強い状況で、家族の一員で在るかのように受け入れられることにより、学生は安堵し、この患者のために頑張りたいという意欲が湧いてくるようである。お互いに情緒的に安定できる相手を必要としているという意味では、相互に依存的な関係であるかも知れない。

2) 先輩役割

職業人として、また人生の先輩として、学生の役に立ちたいという役割は、学生に後輩としての役割を期待していると考えられる。学生は、患者の人生観や価値観を謙虚に受けとめ、真摯な態度で患者に関わろうとしている。このような学生の態度に、患者は病院の中でも他者の役に立つことができるという患者自身の存在価値を再確認していると思われる。

また、先輩役割を認識するということは、患者は病者としてでなく、先輩という役割を通して一人の人間として、学生に関わろうとしていることを意味している。トラベルビーは、看護婦は「看護婦-患者」関係でなく、人間対人間の関係¹⁴⁾を確立するよう努力すべきだと述べている。この先輩役割は、患者と学生の間においても人間対人間の関係の確立とその過程を促進する重要な役割認識といえる。

3) 教師的役割

それぞれの社会的身分に適用される規範を社会的役割という¹⁵⁾。医師や教師は職業的身分を指示するものであり、その身分に役割が付随していると考えられている。患者が学生の実習に対して教師のような役割を認識し、その役割を演じることで、入院により一時的に中断した、あるいは喪失した社会的役割を学生との関わりの中で追体験しているものと考えられる。この教師的役割の追体験により、患者自身が自尊心を回復したり、自分自身の存在価値を認めることにつながっているものと考えられる。従って、学生に教師的役割で関わるといえることは、患者は学生の存在によって情緒的な安定を得ているものと思われる。

患者が学生に対して教師的役割をとること

は、学生には学ぶ立場としての役割を期待する関係である。学生にとっても、患者から提供された課題について勉強し、調べた情報を患者に提供したり説明することで、自分自身の学びにつながっている。また、患者から実習への配慮やケアのアドバイスを得て、学生は患者の存在を心強く感じ、安心して実習に取り組めることになる。

4) 練習モデル役割

患者が学生に親しみを感じ、学生のために役に立ちたいと考える時に、我が身を教材として学生に利用さす役割だと考えられる。患者は学生の看護技術の向上に自分の献身的な関わりが役立つことに喜びを感じるのであろう。

学生には、看護技術向上のための練習者としての役割が期待されている。

受け持ち当初に、どのように学生と関わっていいかわからないという患者にとっては、必要最小限の練習モデルの役割をとることで、学生への対応に関する戸惑いが解消するものと思われる。

5) 患者役割

患者は学生にどんな援助を求めているのだろうか。患者が語った内容からは、ペプロウの提唱する看護婦の役割のうち、教育的役割、情報提供者の役割、カウンセラーの役割を学生なりに遂行すること求めているものと推測される。

家族は患者の置かれた事態に巻き込まれて家族そのものが冷静な対応が難しいことがある。また、患者自身が見栄や面子にとらわれ友人や親族には、不安や苦痛に感じていることを話せないこともある。このような状況では、患者にとっては、批判なしに患者の話を聴いてくれる学生の役割は重要である。話相手としての学生の役割のなかに患者はカウンセラー的な役割を期待しているものと考えられる。患者は自分の考えや気持ちを語るにあたり、看護を学んでいる学生なら自分の話は分かるだろうし、批判なしに自分の考えを聞いてくれるだろうと安心して、この役割を求めているようである。

患者は、医師や看護婦に自分の病気や病状について聞きたくても聞けない状況にいるこ

とがある。忙しそうで時間を取らるのが申し訳ない、説明が難しく聞いても分からないなどその理由は様々である。このような状況にあるとき、患者は様々な情報を学生から得ようとする。学生も勉強の一環として、自分の分からないことは調べ、患者が理解できる言葉で説明を試みている。これによって、患者は必要な情報を入手でき、学生は医学・看護の知識の理解や患者の理解に役立つという双方にとっての利益となっている。

2. 周手術期患者の役割認識の特徴

役割認識の特徴として、家族的役割、教師的役割、練習モデル役割があげられる。患者は、術前には不安や死の恐怖を感じ、術後は疼痛やボディイメージの変化に対する戸惑いや苦痛を感じていることが多い。また退院や社会復帰へ向けての不安も感じている。転移・再発の恐怖に直面しなければならないこともあり、患者自身が乗り越えねばならない課題がある。このように患者にとって非常に精神的に不安定な状況では、誰かに依存したいという願望を感じている場合が多い。こんな時、誰か患者の気持ちが分かる家族がそばにいたり、話を聴くことは、不安を軽減する効果的な方法の一つである。

学生が、家族の一員のような存在として患者の側にいることは、ただいるのではなく、患者と共にいて、不安な時を共有することを意味している。このような関わりを通して、患者の不安はある程度軽減されるであろう。看護婦との関係では、家族的役割の中でも患者は母親役割を看護婦に期待することが多いと予測される。

教師的あるいは練習モデル役割は、関わる相手が学生ならでの認識であろう。

3. 看護への提言

周手術期患者は、学生との関係において多様な役割を認識しつつ、関わっていることが明らかになった。このことは、患者と学生の関係という現象を役割という概念で説明することの有効性を示しているといえよう。

まずは学生自身が、「正規の看護婦ではなく中途半端な存在で、主体的に患者と関わる

ことは難しい」というような思い込みから解放されることが必要であろう。そして、学生なりに様々な役割をとり患者と関わるのが可能であるという積極的な関わりの視点への転換が看護学生に必要とされる。

その上で、看護教員や学生が患者の認識する多様な役割とその行動を理解することで、患者の全体像をよりの確に理解することが可能になるであろう。

4. 本研究の限界

- (1) 周手術期患者を受け持った男子学生は1名であり、本研究の結果を男子学生を含めた看護学生へ一般化するのには難しい。
- (2) 面接の対象者は、学生との関係がスムーズに形成された場合であり、関係の形成に問題が生じた場合は、対象者に含まれていない。依って、人間関係がうまく形成されなかった対象者が、学生との関わりをどのように認識しているかについては明らかにされていない。
- (3) 本研究結果は、患者が語る認知の世界であり、未だ認識してない部分や語られなかった部分については明らかにされていない。

5. 今後の課題

今回は、相互に影響しあっている患者と学生の関係(現象)を役割という概念を用いて患者の立場からその関係のかなりの部分を説明することができた。次に、患者・学生の間を両者の視点で客観的にとらえるために、患者と学生の間を役割関係のモデル化を試みたい。

また、関係がスムーズに形成されなかった患者は、どのような役割を認識していたのかについても研究する予定である。

V. おわりに

本研究は、手術を受ける患者が看護学生との関わりをどのように受けとめているかを明らかにすることを目的とし、20名の患者に面接調査を行ったものである。

語られた内容をGrounded Theoryの手法を用いて分析した結果、患者は役割を認識しつ

つ学生と関わっていたことが明らかになった。その役割認識として、家族的役割、先輩役割、教師的役割、練習モデル役割、患者役割が抽出された。

患者は、自分の置かれた状況に応じてこれらの役割を単独で、あるいは幾つかを組み合わせず遂行していることが明らかになった。患者がこれらの役割を認識するという事は、学生にその補足的役割を期待しており、また認識した役割を遂行することで、様々なメリットが得られていると推察された。

これらの役割認識のうち家族的役割は、周手術期患者の役割認識の特徴であると考えられた。

謝辞

面接調査に快くご協力頂いた患者の皆様には御礼申し上げます。そして、術後の順調な回復とご健康を心よりお祈りいたしております。

本研究結果は、第18回 日本看護科学学会(1998年12月)で発表したものである。

〈引用文献〉

- 1) 岡谷 恵子：看護ケアの質評価の日本的展開，インターナショナル・ナーシングレビュー，18(3)，pp.6-14，1995.
- 2) Peplau E.H.：人間関係の看護論(1版)，稲田八重子他訳，医学書院，1974.
- 3) Travelbee J.：人間対人間の看護(1版)，長谷川浩他訳，医学書院1974.
- 4) Morse M.J.：Involvement in the Nurse-Patient Relationship, Qualitative Health Research, pp.333-359, Newburg Park.
- 5) 小林栄子他：学生と患者との関係を測定するための基準の作成 第20回 看護教育 pp.51-53, 1989.
- 6) 牧野智恵他：看護学生と受け持ち患者との人間関係，第22回 看護教育，pp.172-175，1991.
- 7) 梶谷佳子他：学生の自尊感情と臨床実習における患者-学生関係の関連，第26回 看護教育，pp.85-87，1995.
- 8) 安東淳子他：学生と患者との人間関係形成に影響を与える要因についての一考察，

- 第21回 看護教育, pp.116-119, 1990.
- 9) 長田 京子: 臨床実習において看護学生が患者との人間関係で体験する危機の実態 第25回 看護教育, pp.36-38, 1994.
- 10) 稲岡文昭他: 看護研究におけるグランディドセオリー・アプローチ, 看護研究, 20(3), pp.320-325, 1987.
- 11) 吾妻 洋: 社会心理学諸説案内(1版), p509, 一粒社, 1981.
- 12) 対人行動学研究会編: 対人行動の心理学 p100, 誠信書房.
- 13) 前掲著 2) p.54
- 14) 前掲著 3)
- 15) 前掲著 11) p.505